



TITLE:

京大広報 No. 237

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 237. 京大広報 1982, 237: 247-250

ISSUE DATE:

1982-06-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209449>

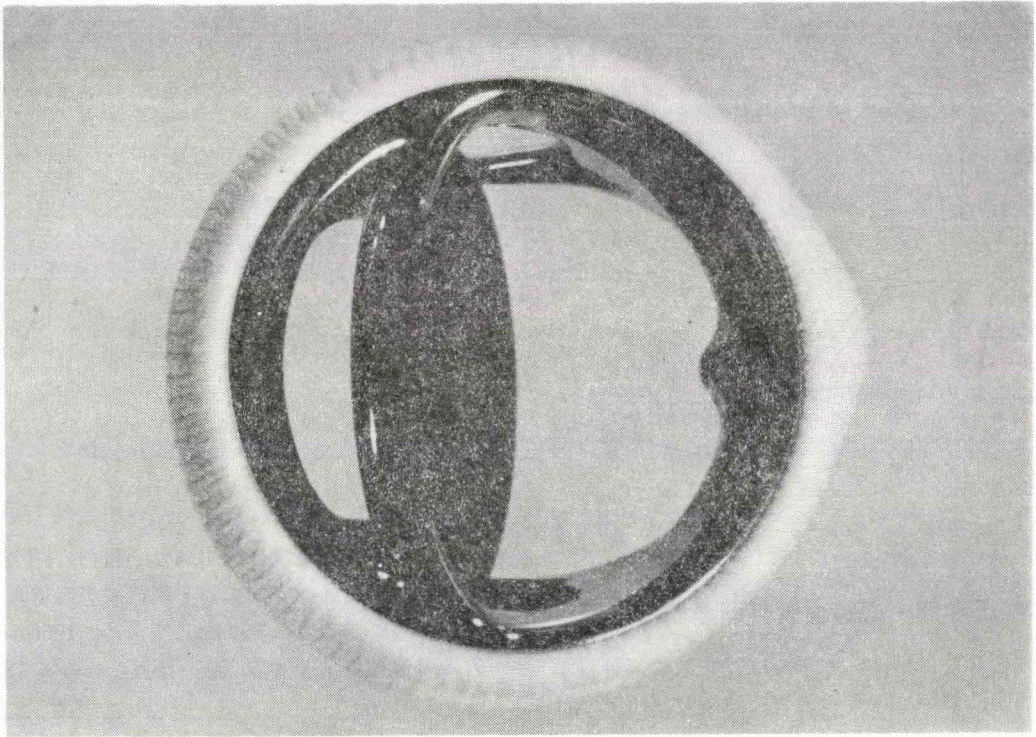
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 237

京都大学広報委員会



傾斜円板型人工弁 一関連記事本文 248 ページ

(拡大写真 (弁開放時)。現在最も広く用いられている人工弁である。円板はパイロライト・カーボン製、台座はダクロン布によって被覆されており、これを人工縫合糸により病的心臓弁を切除したあとに縫着、移植する。各種口径のものがある。)

目 次

吉田山コース.....	248	日 誌.....	249
< 紹 介 >		< 随 想 >	
医学部・心臓血管外科学講座.....	248	温古瑣談	名誉教授 鈴江 懐..... 250
昭和57年度創立記念行事 学術講演会の開催	249		

＜大学の動き＞

吉田山コース

このたび本学は、吉田神社の協力を得て同神社参道の一部を整備し、全長1kmのコースを開設した。

このコースは、起伏・変化に富み、各自の体力に応じて走ることができ、また、新緑をはじめ四

季折々のたたずまいが満喫できるので、散策にも適している。なお、山頂には、旧第三高等学校の「紅萌ゆる」の歌碑があり、そこからは市内の眺望もすぐれている。

学生・教職員が、体力の増進をはかりあるいは浩然の気を養うためなどに、大いに利用されることを勧めたい。

(学生部)



＜紹介＞

医学部・心臓血管外科学講座

心臓血管外科学は、本学では従来医学部外科学第二講座において、その教育、診療及び研究が行なわれてきたが、昭和56年度に国立大学では初めて、独立の完全講座として本学部に新設された。

その新設の必要性を理解願うためには、心臓血管外科学が発展してきた経緯について述べることは是非とも必要となろう。

心臓血管外科学は明治29年の Ludwig Rehn 博士による心臓創に対する縫合手術に始まったといっても過言ではない。しかし、その急速な進歩は1940年代からである。

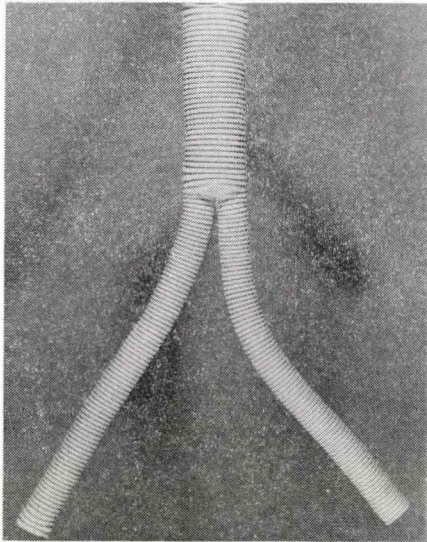
その進歩の要因は輸血、麻酔学の進歩、抗生物質の出現、心臓カテーテル法による各種心疾患の病態生理の解明とその診断技術の進歩、低体温麻酔法及び人工心肺装置による体外循環法の確立、

心血管造影法の進歩、医用高分子材料の開発、移植免疫学の発展並びに術前・術後の患者管理態勢の整備等に要約される。そして、特に1950年代に入ってから進歩には目を見張らせるものがある。

心臓血管手術手技の進歩、改良、血管吻合器及び代用血管の出現、改善、人工弁の開発、同種弁及び異種弁（仔牛、豚弁）の移植技術の進歩、ペース・メーカーの開発等、人工材料、各種補助的治療装置の相次ぐ進歩、開発がその発展を加速度的に速めたためでもある。

それに伴い、その教育、診療及び研究の範囲も、治療の対象も拡大の一途をたどり、先天性の心奇形はもちろんのことながら、弁膜症、虚血性心疾患の如き後天性心疾患、不整脈、心臓腫瘍、心臓外傷といった心疾患、更には大動脈瘤、Budd-Chiari 症候群、肺栓塞症、大血管の異常、血管損傷といった大血管性の疾患にまで及び、必

要によっては、近い将来同種心臓移植や人工心臓の植え込みさえも行なわれる機運にある。



代人工血管

従って、その様相は従来とは一変し、単なる心臓、大血管病変の病因解明、診断、治療の域にとどまらず、その衝に当るためには、そこに材料工学、電子工学、生体工学、機械工学といったような境界領域に至るまでの広く、深い知識が要求されるようになってきた。

殊に、最近では社会・経済の複雑化、緊張の連続に加えて、本邦人の食生活の欧米化に伴い、社会の枢要な地位にある方々の虚血性心疾患の罹患率並びにそれによる死亡率は増大の一途をたどりつつあるともいわれ、欧米同様、本邦人死因の第一位になる日もそう遠くはないものと予想され、心臓血管外科分野の今後果たすべき使命は益々高いものとなることであろう。

そのような時期にあたり、本学部に心臓血管外科学講座の独立をみるに至ったことは、非常に時宜を得た喜ばしいことであるといわなければならない。(医学部)

昭和57年度創立記念行事 学術講演会の開催

本学では、創立記念日（6月18日）を祝し、学術講演会を下記のとおり開催いたします。
 本学教職員、学生の来聴を歓迎します。

記

講師 西川義正（本学名誉教授）

略歴

1913年富山県に生まれる。1936年東京帝国大学農学部卒業。1957年京都大学農学部教授。1976年から帯広畜産大学長。「家畜の繁殖生理と人工授精」に関する業績により、1956年日本農学賞、1961年農林大臣賞を受賞。「家畜の繁殖生理とその人為支配」に関する業績により、1964年日本学士院賞を受賞。1982年から日本学士院会員。現在世界畜産学会会長。農学博士。

演 題 畜産界における性細胞の

人為利用とその経済効果

日 時 昭和57年6月21日（月）

午後3時30分から

場 所 京大会館 101 号室

(学生部)

日 誌

(1982年5月1日～5月31日)

5月10日 総長、アメリカ合衆国における高等教育・研究機関視察のため、同国を訪問（5月19日まで）
 14日 木材研究所公開講演会
 18日 保健衛生委員会
 19日 国際交流委員会

20日 放射性同位元素等管理委員会
 24日 学位授与式
 25日 評議会
 “ 大学院審議会
 “ 安全委員会

